

立ち読み版

ハーレム カーニバル

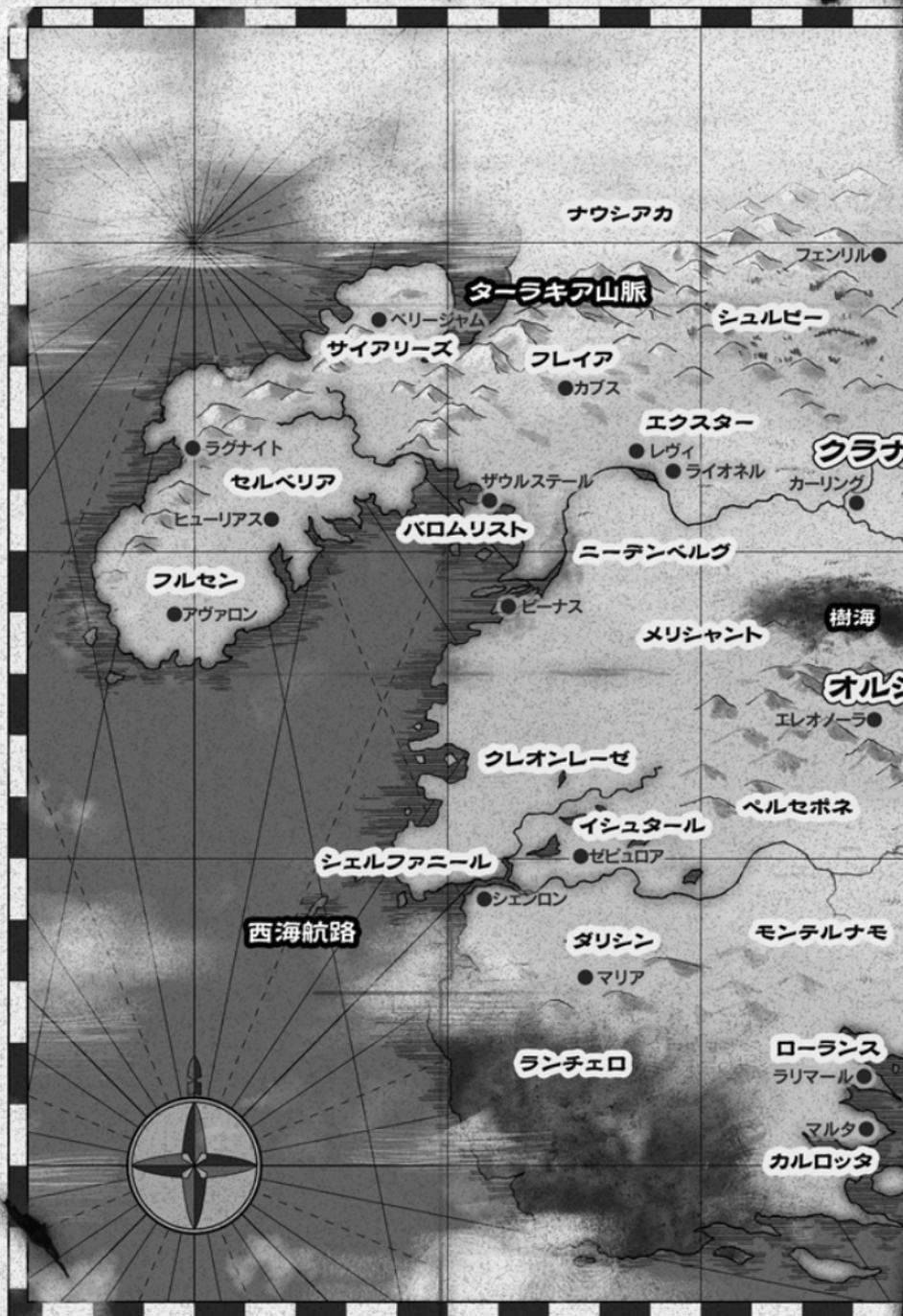
*Harem
Carnival*

小説 竹内けん 挿絵 にの子



ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル

ターラキア山脈

シュルビー

サイアリーズ

フレイア

●カブス

エクスター

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

カーリング

●ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

樹海

オルシ

エレオメーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

●ゼビュロア

シエルファニール

●シェンロン

西海航路

モンテルナモ

ダリシン

●マリア

ランチェロ

ローランス

ラリマール

●マルタ

カルロッタ





登場人物紹介

Characters



ガライシャ

旅芸人の一座に所属する踊り子。
若いながらも抜群のセンスとオーラを持っている。

セシル

一地方を治めるマリオベール家の息子。
純朴な性格で性知識もまだ乏しい。



キルエリツヒ

セシルの乳母の娘で、親衛騎士を務めている。セシルに対しては甘々な態度を取る。



ラプンツェル

ラルフィント王国雲山朝の国王ギャンプレーの妻。清廉で上品な貴婦人。

第一章

祭りの夜

第二章

旅の一座

第三章

王妃ラプンツェル

第四章

享楽と背徳の都

第五章

密行

第六章

復讐の果てに

必死に放尿を止めようとするのだが、止まらない。

(な、なんなんだ。凄い気持ちいい……)

キルエリツヒの手を握ったままセシルは、膝から崩れ落ちる。

驚いた女騎士は、慌てて若き主君にひざまずく。

「セシル様っ!! いかがされました?」

「キリー、ぼく、もうダメだ……」

セシルの顔は真っ赤で、酷い汗を掻いている。

「セシル様、御免!」

驚いたキルエリツヒは次の瞬間には、セシルを持ち上げた。いわゆるお姫様だつこで抱え上げると、大急ぎで人込みを突破する。そして、祭りの会場のすぐ傍に待たせていた馬車に駆け込んだ。

「おい、どうした?」

「兄上、今日はここまでです」

「了解した」

お伴の者同士で多くは語りあわず、すぐに行動に移す。

動きだした馬車の中で、ソファーに寛がせた主君の額に、キルエリツヒは濡れたタオルを置いてやる。

「風邪ではないと思います。おそらく人に酔ったのですね」

確かにあのような大勢の人込みの中に入ったのは初めてのことだ。酔っても不思議ではない。

しかし、そんな生易しいことではないことを、セシル自身が一番自覚していた。思わず股間のあたりを握る。

（う、おちんちんがガチガチになっている。それにおしっこが止まらない）

セシルの手の動きを、キルエリツヒは敏感に察した。

「っ?! 何かお隠しですか？」

「い、いや、こ、これは……」

動揺しながらもセシルは必死に両手で股間を隠す。しかし、キルエリツヒは国を代表するような腕の立つ女騎士だ。いまだ半人前の少年に抵抗できるような相手ではない。

「お見せください」

容赦なくセシルの両手を掴んで、無理やり股間を覗き込む。

「あ」

キルエリツヒは驚愕に目を瞪る。

ズボンは内から張り裂けそうなほどにテントを張り、全体的に濡れて変色していた。

（う、おしっこ漏らしたの……見られちゃった）

羞恥のあまり顔から火が出そうなセシルを前に、驚愕に目を見開くキルエリツヒ。セシルは涙ながらに訴える。

「くっ、ごめん。情けないけど、その……綺麗なお姉さんたちの踊りを見ていたら、その……おしっこに行きたくなってきて、その気が付いたら……ぼく、そのお漏らししちゃった」

断腸の思いで告白した少年の前で、キルエリッヒはズボンに手をかける。

「あ、何をやめて……」

漏らしてしまったパンツを脱がされるのは屈辱である。しかし、キルエリッヒは容赦なく引きずり下ろした。

「失礼」

「あっ」

少年の抵抗は虚しく、ズボンとパンツは引き抜かれ、キルエリッヒは後ろに投げ捨てた。

「あう」

いくら実の兄弟よりも親しい仲はいえ、生殖器を見られるのは恥ずかしい。セシルは反射的に両手で股間を隠す。

キルエリッヒは両手で、座席に座るセシルの両膝を持ち、左右に開かせながら厳しく命じる。

「セシル様。手を退かせてください。症状がわかりません」

「……」

キルエリッヒの剣幕に負けたセシルは、覚悟を決めて両手を離した。

ふるんっ！

小さな逸物がはね上がった。

「こ、これは……っ!!」

それは、まるで少女の指先のような細くて小さくて頼りない、生っ白い逸物であった。先端は完全に薄皮に包まれ、大きく皮が余った包茎。

それが白濁液塗れになりながらも、健気に隆起していた。

「……ごくり」

主君の濡れそぼちながら立った逸物を前に、キルエリッヒは生唾を飲む。

失禁した股間を、異性、それも実の姉妹よりも親しい者に見られるのは気恥ずかしい。もはや隠すことを諦めたセシルは、背もたれに身を預けながら惚けた表情で口を開く。

「さっきの踊りを見てから、ずっとこの調子なんだ。ぼく病気かな？」

不安そうな主君を前に、首を横に振るったキルエリッヒは、右手を伸ばして少年の濡れた逸物に付着した白濁を掬い上げる。

そして、親指と人差し指の腹でヌチャヌチャと感触を確かめた。それは尿というには、あまりにもゼリー状であった。

しかし、ところどころ黄色く混じっているのはやはり尿なのかもしれない。

「いえ、これは病気ではありません」

「でも、おちんちん、さっきから大きいままなんだ。それにおしっこが止まらない……」

恥辱と不安に震える主人を前に、キルエリッヒは懐から絹のハンカチを取り出すと、そつとドロドロの逸物を包み込んだ。

「年かさの者から申しつかっております。若様もお年頃ですから、そろそろこういうことが起きると……」

「え……どうということ？」

不思議がるセシルに、ハンカチで逸物を包みながらキルエリッヒは真面目に応える。

「セシル様は、精通を迎えられたのです」

「精通？」

キョトンとしているセシルに、キルエリッヒは真面目に頷く。

「はい。男の子の成人の証です。女の初潮と同じで必ずくるものなのですから、恥じ入ることはありません」

優しく語りながら、キルエリッヒは逸物に付着した汚れを拭きとろうとしたのだろう。ハンカチを引いた。

ズルッ。

それでも精通を迎えた直後の少年には強すぎる刺激であった。

「はうッ！」

セシルは声なき悲鳴とともに、のけぞった。

ブシユッ！

絹のハンカチは逸物を横から包んでいたため、先端には遮蔽物がなかった。尿道口から再び勢いよく噴き出した白い液体は、そのままキルエリッヒの顔に浴びせられる。

主角の強い美貌の鼻筋を、濃厚な液体が滴り、黒い軍服も白く染めた。

「ああ……キルエリッヒ、ごめん」

「いえ、謝罪には及びません。わたくしこそ配慮が足りませんでした」

キルエリッヒはハンカチに包まれた逸物から手を離すと、鼻筋にかかった精液を指で掬った。

ヌチャーと粘液の糸が引く。

その卑猥な光景に、セシルが鼻白んでいると、キルエリッヒはペロリと舌を出して舐めてしまった。

「ああ、凄い。これがセシル様の精液。なんと熱くて濃い……」

女騎士はさながら、酒にでも酔ったかの態である。

「キ、キリー……!!」

驚愕するセシルの前で、キルエリッヒは自分の顔や軍服にかかった白濁液を指で掬うと、片っぱしから食べてしまった。

「美味しゅうございます。セシル様の搾りたての精液を頂けるなんて、宝石の山を頂くよりも、女の名誉」

キルエリッヒはセシルが生まれたときから常に傍らにいた女性である。しかし、このよ
うな表情は見たことがない。

あまりにも卑猥な女がそこにいた。

普段の凛々しさとのギャップからセシルは怯えてしまう。

身みだしな嗜みを整えたキルエリッヒは、セシルの逸物を綺麗にしようと、手に包み込む。

「ああ」

ドビュッ！

再び逸物の先端から白濁液が飛んだ。

顔から黒い軍服の胸元までが、再び真っ白く染まる。

「またですか？」

さすがにキルエリッヒは呆れ顔になる。

「ご、ごめん。キリーにそこを触られていると、気持ちよくてえ」

精通したばかりだというのに、綺麗なお姉さんに逸物を握られているのだ。鎮まるはず
がない。

「構いません。セシル様の身の回りの世話をするのが、わたくしの仕事なのですから」

優しく微笑んだキルエリッヒは、まるで母親が子供の鼻でもかんでやるかのように、何
度も丁寧に逸物を拭い清めてくれた。しかし、拭っても拭っても綺麗にならない。

ピクンピクンと痙攣する小さな逸物は、さながら壊れた蛇口のようにドクドクと脈打ち

ながら、止め処ない粘液を垂れ流していたのだ。

「ああ、困りました。これでは埒があきませんね。もはやハンカチでは足りません」

「ご、ごめんなさい」

連続射精を止められないセシルは、涙ながらに謝罪する。

そんな年下の主君の精液塗れになりながら、欲情しきった顔のキルエリツヒは提案する。

「仕方ありません。わたくしの舌で綺麗にしてあげます」

「キリー、何を？」

キルエリツヒの宣言に不穏なものを感じたセシルだが、止める暇もなかった。

精液をたつぷりと吸って重くなつた絹のハンカチを投げ捨てたキルエリツヒは、いかにも軍人らしいキビキビとした仕草で、セシルの股の間に跪くと、暴れようとしたセシルの両足首をそれぞれの手で掴んで、ぐいっと左右に広げてから、おもむろに主君の股間に顔を近づけた。

「それでは失礼いたします」

「キルエリツヒ、何をっ!!」

驚愕するセシルが見下ろす中、大口を開けたキルエリツヒは、赤い舌を伸ばした。

凛々しい女騎士の彼女が、こんなにも舌を長く伸ばしているさまを、セシルは初めて見た。

その卑猥な表情に、セシルは怯え、身体を固くする。

赤く濡れた舌先は、肉袋と肉幹の中心点に下ろされた。そこから、裏筋を舐め上げていく。

ぷっくり膨らんだ肉袋を、まるで葡萄の房でも啄むつばように、ペロペロペロペロと舐め回される。

「あ、キルエリッヒ！ 何を!? き、汚いよ」

セシルは自重を促すが、忠義に厚い女騎士は止まらなかった。

「問題ありません。わたくしはセシル様の肉便器になるように仰せつかっている女です」

「な、何それ？」

意味がわからないと、惑乱する主君の逸物に、キルエリッヒは丁寧ていねいに舌を這わす。

包皮に包まれた亀頭の先端からは、止め処なく白濁液が溢れて、キルエリッヒの火照った顔に浴びせられている。

「わたくしは単にセシル様の護衛というだけでなく、セシル様が性欲を処理したいと思つたとき、後腐れなく遊べるように、傍に置かれていたのです」

肉袋の中身である二つの睾丸を散々に弄んだ後、赤い舌は肉幹を這い上がってきた。そして、頂たてにまで達すると赤い舌を口内に収めたキルエリッヒは、ドロドロの逸物をぱくりつと口に含んでしまった。

「あっ」

目を瞠るセシルの眼下で、牡としての機能に目覚めたばかりの生殖器が、凜々しい女騎

士の唾液漬けにされている。

まだ幼年期を抜けきっていない少年の逸物はそれほど大きくない。肉幹だけでは飽き足らず、肉袋まで口内に頬張ったキルエリツヒは、美味しそうにしゃぶり上げてくる。

「う、う、うん、うん……ふん」

鼻を鳴らしながらキルエリツヒは、壊れた蛇口を吸い上げた。

「ひい、ひい……や、やめて、キリー、今日のキリー変だよ……、ああ、そんなところ吸われたら、変になる。おちんちんが、身体が、頭の中が変になる」

精通を迎えたばかりの少年に、それはあまりにも強すぎる刺激であった。

射精が止まらない。セシルは半狂乱になって襲いくる快感に翻弄された。

心から信頼するお姉さんに逸物を啜えられたセシルは、さながら放尿する勢いで射精を繰り返した。

そして、ドクドクと流れ出る液体は、あまさず底なしのお姉様の胃袋へと消えていく。

「チュ——ッ」

キルエリツヒはさながら尿道をストローにして、睾丸から直接、精液を吸い上げているかのようであった。

ビクン、ビクン、ビクン……。

小さな肢体が、さながらオコリにかかったように激しく痙攣し、大きな瞳は上にひっくり返し、開いた口元からはだらしなく涎を垂らした。



観客たちの見守る中、萎れきっていた逸物が、みるみるうちに体積を倍増させていき、ついには、臍に届くほどに反り返ったのだ。

「おお、復活しおった」

「勃った。勃った。さすがに若いの」

観客からの感動の声に、セシルはちよつと赤面する。しかしながら、自分の逸物を軽く握って確認してみる。

（よし、これならやれる）

自信を持ったセシルに、仰向けのガライシャは頷く。

「いいわよ、いらっしやい」

「ガライシャさん」

歓び勇んだセシルは、濡れそぼつ膣穴に、自らの肉棒を添えた。

「入れます」

ガライシャの両足を肩に置いたセシルは腰を落とす。

ズボリ！

少年の肉棒は、難なくガライシャの体内に飲み込まれていった。

「痛っ」

いわゆる屈曲位で挿入したセシルは、眉をしかめたガライシャを見て、恐る恐る質問する。

「ガライシャさんって、やっぱり、初めてだったの？」

「そ、そうよ。まさかこんな形で処女を捨てることになるとは思わなかったけどね。でも、大丈夫、わたしは踊り子よ。股を開くのは当たり前だし、処女膜なんて遠い昔に破れているはずよ」

「なるほど」

確かにガライシャが豪快に片足を上げたり、開脚したりしているさまは何度も見ている。あれでは処女膜も持たないだろう。

（うお、処女膜はないといっても、初めては締まりがきつい）

この乱交劇の初っ端を飾ったスフィールに次いで、二度目の破瓜はかに立ち会ったことになる。

淫乱お姉様たちと楽しんできたセシルは、特に処女に拘こたわりはないつもりだったのだが、やはり大好きなお姉さんの初めてになれた、というのは嬉しいものだ。

まずは自分の逸物が、ガライシャの体内に馴染むように腰を回した。

（くう、ガライシャさんのオマ○コって奥がブツブツっつしている。おちんちんの先端の裏側に引つかかかって気持ちいい♪）

セシルなりにガライシャの体内の構造を把握した。ガライシャもそれほど痛がっていないようだ、と見て取ったところでセシルは提案する。

「それじゃ、このまま一気にいきます」

「ええ、頑張りなさい」

破瓜中のお姉様に励まされて、セシルは腰を動かす。

グツチュ、グツチュ、グツチュ。

腰を上下させるたびに、贅肉が肉棒を扱といてくる。

「あつ、あつ、あつ、あん……」

最初は顔をしかめていたガライシャであったが、肉感的な唇の狭間から甘い吐息が漏れ出した。

(あ、ガライシャさんが感じてくれている。感じてくれているんだ)

踊りを見ていただけで精通を迎えてしまったほどに、セシルから見るとセックスシンボルなお姉様の体内に逸物を入れて、無邪気な少年は夢中になって腰を振るった。

すると、一突きごとに、セシルの目の前で、ポインポインと迫力ある乳房が揺れていることに気が付いた。

(ああ、ガライシャさんのおっぱいだ)

揺れる肉まんに魅せられたセシルは、首を伸ばしてカプリと左の乳首に吸いついた。

「あん♪」

ガライシャの喘ぎ声が一段と高くなった。

キュンキュンキュンキュン。

ブツブツの膣洞が心地よく、肉棒を絞り上げてきた。

(す、凄い。ガライシヤさんって、エッチ嫌いなのに。身体は凄いエッチというか。エロエロだ)

犯し心地のよすぎる身体に、セシルの理性はぶっ飛んだ。

「あ、こら、そんな、激しい、あつ」

ガライシヤの泣き言など無視。その腰を破壊せんと欲するかのように、セシルはガツガツと力の限り腰を振るつた。

パンパンパンパンパン！

男女の肉がぶつかりあい、激しい拍手音を上げる。

ブシュブシュブシュッ！

露ダク。いや、露ダクダクの膣穴から溢れ出す愛液が飛沫を上げて、ガライシヤの下腹部から顔まで濡らす。

「あつ、あつ、あつ、あつ」

滅茶苦茶な少年の突貫を受けて、気高き踊り子のお姉さんも、すっかり牝顔になってしまっている。

(ああ、あのガライシヤさんがこんな顔をするなんて……。オマ○コの中、精液でいっぱいになりたい)

そんな欲望が芽生えるとともに、自然と射精欲求が高まってくる。

「ガライシヤ、出すよ！」

「い、いいわよ。出しなさい。わたしも、もう、イクと思う、ああ、もう、らめ」

狂乱する少年に翻弄されたガライシャの許可の声を聞きながら、セシルは断末魔の叫びを上げていた。

「うおおおおおお!!!」

ドビュ！ ドビュ！ ドビュ——ッ！

もう出ないと思っていたのに、いつぱい出た。

「ず、凄く、ビクンビクンして、ああああああ!!!」

男の射精に合わせて、健康で敏感な女体は絶頂してくれたようだ。

官能的な唇を開いて、真珠のような前歯を光らせて、ガライシャは悶絶している。

(気持ちいい……でも、もうほんと限界……)

すべてを出しきったセシルは、そのままガライシャの大きな胸にぐったりと沈んだ。

女体の森の中で眠りに落ちたセシルを、踊り子たちは優しく取り囲む。

そして、だれかが国王に報告している。

「百人終わりましたな」

「そうじゃな。約束は約束じゃ。セシルにマリオベール奪還を許可しよう」

ギャンブラーの大儀そうな声に、廷臣のだれかが反発する。

「しかし、そうなりますと、ガープネスのほうか」

「わからぬか？ ガープネスとセシル。生き残ったほうを、マリオベールの領主と認める



「とうことだ」

「なるほどさようなことでしたら」

なんとも非情で、そして、いかにも混沌としたラルフイント王国らしい結論である。

「くつくつくつ、さて、ラプンツェルよ。おぬしの甥っこのおかげで、予も久しぶりにみ
なぎってきたわ。可愛がってやるとしよう」

「いや、陛下もまだまだお若い」

廷臣たちが国王に追従する声を聞きながら、セシルの意識は完全に途切れた。

いわゆる門前の小僧習わぬ経を読む、といった感じだ。

(気持ちいい。おちんちんからくる快感と、お尻の穴からくる快感が、肉袋のところでも
つかりあって火が出そうだ)

辜丸が大きく膨れ上がって破裂しそうだ。

たちまちのうちに射精しそうだが、この快感の中でもっともっと遊びたいと思ったセシルは必死に我慢する。

そんなとき、部屋扉が開き、また別の女がやってきた。

「あらあら、セシルったら、また女の子を二人もそんな風に侍らせちゃって、ほんとしよ
うもない子ね」

「あ、叔母上……」

口元から涎を垂らしたのだらしない表情のセシルが目を向けると、入口には侍女頭スフィ
ールを従えた、王妃ラプンツェルがいた。

「ラプンツェル様っ!!」

驚きの声を上げたのはキルエリツヒだった。

マリオベール出身で、セシルと仲のよかったラプンツェルは、当然、キルエリツヒとも
顔見知りである。

嫁ぐ前のラプンツェルは、清く正しいお姫様であり、趣味はお祈りという保守的な人だ
った。当然、セシルと同じように性的にも潔癖な人というイメージを持っていたのである

う。

叱責を恐れるキルエリツヒとは裏腹に、ラプンツェルは慌てず騒がず、古拙こせつの笑みを返す。

「キリーちゃん久しぶりね。気にせず続けなさい」

「あ、はい……」

キルエリツヒは戸惑いながらも、再びセシルの肛門に舌を這わす。

ラプンツェルのほうは、セシルの傍らに立つと、その頬に手を添えた。

「やったことの大きさに戸惑って、めそめそ泣いているかもしれないから、慰めてあげようと思って来たんだけど、その必要はなかったわね」

「は、はい……」

実際、泣いていた身としては気恥ずかしい。

「セシルは将来、大物になるかもね。あの人もセシルのことを本当に気に入ったみたいだし……」

うっとりとした表情を浮かべたラプンツェルは、そのままセシルの唇を奪う。

「う、うん、うむ」

バーミア王宮にいたときには、毎夜、たつぷりと楽しんだ仲だ。いまさら接吻することに異議はない。しかし、二人の関係がバレて、夫であるギャンプレーにお仕置きされた記憶も生々しい。

このようなことをしていいのか、とセシルは恐れてしまう。接吻を終えたセシルは恐る恐る質問した。

「あの……いいんですか？」

「何が？」

無邪気に首を傾げるラプンツェルに、言葉を濁したセシルはしぶしぶ付け加える。

「その……陛下が」

セシルが何を気にしているのか、ようやく悟ったようでラプンツェルはふんわりと笑った。

「ああ、セシルには言っていなかったわね。わたし、陛下から好きだけ浮気していいって言われているの」

「えっ」

思いもかけなかった返答に、セシルは絶句する。

ラプンツェルははにかみながらも、嬉しそうに続けた。

「陛下はあの通りのご年齢だから、あちらはもうダメみたいなの。でも、わたしの歳でセックスを楽しまないのは気の毒だ、とおっしゃってね。あの甥っ子が気に入ったのなら、若いちゃんぽをたっぷりと食べてきなさいって言われたの。女は性的に充実しているほうが輝いていて好きなんですって」

「こ、心の広い旦那さんですね……」

驚きを通り越して呆れるセシルに、ラプンツェルは悪びれずに頷く。

「うん、セシルのおかげで、陛下との距離が縮まったわ。いままでは何を考えているかわからなくて怖かったのだけれど、いまは心からお慕い申し上げることができるようになったの」

夫婦関係は人それぞれというが、セシルにはやはり理解できない世界である。

「でも、わたし、男の人ってなんか怖いから。セシル以外とはこういうことする気はないのよ。セシルは夫公認。わたしの若いツバメね。いい？」

「はい。ぼくは叔母上のツバメです」

セシルにとつて、ラプンツェルは、生涯、足を向けて寝られない大恩人だ。

彼女が望むなら、なんだつてできる。いや、するつもりだ。

「それじゃ、いつもみたいにわたしのことを可愛がつて♪」

「承知しました」

下半身をガライシャとキルエリツヒに前後から捕らえられた状態のセシルは、気取った仕草でラプンツェルの青い衣を脱がす。

それを澄ました顔で従っている侍女頭ステイルが受け取る。

中から現れたブラジャーとショーツとガーターベルトといった下着類は、大国の王妃らしく高級な作りだが、薄いピンク色で清楚な雰囲気醸し出している。とてもではないが、甥っことのアバンチュールに溺れている、浮気妻とは思えない。

セシルは、鎖骨に接吻すると、ブラジャーの肩紐を外して、白い乳房を露出させた。左手で乳房を揉み、口でもう一方の乳首を啜る。そして、右手はショーツの中に入れて五指を動かす。

「ああ、凄い。セシルったら、ほんとイケない子。こんなに気持ちよくされたら、わたしいいなりになっちゃうよ」

「ぼくは叔母上の忠実なシモベですよ」

清楚なのは見た目だけ。中身は完全にエロエロに熟れた王妃様は、ショーツでは吸収しきれない愛液で濡れた内腿をモジモジさせながら訴える。

「そ、それじゃ、下の娘たちに先駆けて、わたしがもらっちゃっていいかしら？」

「はい。もちろんです」
ガライシャとキルエリツヒ。二人ともセシルにとって大切な女性であるが、ラプンツェルは別格である。

ただちに下半身の前後に取りついている女たちを振り払ったセシルは、ラプンツェルをお姫様だっこにして、ベッドに近づくと、放り投げる。

「キャッ」

驚くラプンツェルの背後に取りついたセシルは、素早く濡れたショーツを抜き取ると、侍女頭スフィールに投げ渡してから、左足を豪快に上げさせる。

「あん、セシルったら、今日はワイルドって感じね」

ラブンツェルは右側面を下にして、左足を高く掲げた姿勢になる。その背後からセシルは抱きついた。

ラブンツェルのドロドロに濡れてヒクヒクしている生殖器が、見物人の女たちによく見えただろう。

見られているということを意識して、ラブンツェルの身体が桃色に染まる。

「キリーはまだ、叔母上の正体を知らないんです。たつぷりと教えてあげましょう」
嘯いたセシルは背後から逸物をぶち込んでやった。

「ああ、ああ、硬い。硬くて大きい。ちよつと見ないうちにセシルのおちんちん、また大きくなつたあ」

「ありがとうございます。叔母上は一段とエロくなりましたね。おちんちん入れられただけでもう、イっちゃったんですか？」

「だ、だって、久しぶりだったんだもん」

頬を染めたラブンツェルは、恥ずかしそうに呟く。それから大きく溜息をついた。

「はあり、わたしダメな女ね。人妻、それも王妃という立場にありながら、セシルのおちんちんが大好きなの。可愛い甥っこに溺れて、叔父を殺した。世に毒婦と言われるのでしようね」

「言いたいやつには言わせておけばいいと思います」

「そうね。わたしはセシルさえいればそれでいいの」

惚けた表情で頷くラプンツェルに、セシルは積極的に同意した。

「ええ、叔母上にはぼくがいますから。そして、ぼくには彼女たちがいる」

本気でラプンツェルの悪名をすべて引き受けるぐらいの覚悟はあるセシルは、ベッドに仰向けになった。

当然、貫かれたままであるラプンツェルも仰向けになった。

背面の女上位。いわゆる『撞木反り』しゅもくさかと言われる体位だ。

そして、ベッドの周りで見学していたガライシャとキルエリツヒに声をかけた。

「二人とも、叔母上に奉仕してあげて」

「承知しました」

「はいはい」

セシルの呼びかけに、キルエリツヒは堅苦しく、ガライシャは呆れながら応じ、それぞれベッドに乗ってきた。

「あ、な、何をつ!？」

「男は怖くても、女なら怖くはないでしょ」

怯えた表情をするラプンツェルを、セシルは慰める。

そうこうしているうちに、ラプンツェルの右の乳房をガライシャが、左の乳首をキルエリツヒが捕らえた。

「綺麗なおっぱいですね」

「ええ、わたしたちより年上の人妻だというのに、この蕾のような乳首はほんと処女みたい」

「聖女様と例えるに相應しいですね」

口々に褒めそやしながら、二人は王妃の乳首を舐めしやぶる。

「ああ、こんな若くて美人でおっぱい大きい娘たちに弄ばれるだなんて、恥ずかしすぎるう〜♪」

ラプンツェルの恥辱の泣き言を聞いて、セシルは気づいた。

確かに三人の女のうち、一番年上のラプンツェルが、一番貧乳である。なんか面白い。

妙な興奮を感じたセシルは、両手でラプンツェルのそれぞれの膝の裏を持ってM字開脚にすると、ガツガツと腰を突き上げた。

「ひい、らめ、そんな、左右のおっぱいしやぶられながら、そんな激しく突かれたら、ああ、おかしくなる。おかしくなっちゃう！」

「いいですよ。思う存分、おかしくなってください」

「ああん、大きい、やつぱり、セシルのおちんちん、硬いだけじゃなくて、大きくなった。こんな硬くて大きなちんちんでゴリゴリされたら、わたし。ああ、おっぱいも気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい」

国民には、清楚で可憐な王妃。特にここマリオベール領では聖女の如く慕われる女が、蟹股になり、甥っこの逸物を啜えて、自ら腰を振っている。

(くうく、叔母上のオマ○コって、決してきついわけでも、髣が豊富ってわけでもないんだけどなあ。シンプルイズベストというか。ちんちん吸いついて離れない)

男女の結合部からは、ブシユブシユと飛沫が上がっていた。

そんな痴態を寝台の傍らに立った、ラプンツェルの側近である侍女頭スフィールは、ひっそりと観察していたが、見てられない、といった風情で、頬の染まった顔を背けた。

しかし、ロングスカートの上から股間のあたりを必死に押さえている。

「ああ、セシルのちんぽ、イイ、やるたびに大きく硬くなる。これが成長期のね。わたし、ダメ、いまだって、もうイきっぱなしなのに、これ以上、大きくなられたら、わたしも、イイのお」

清楚な顔をして意馬心猿なラプンツェルに、セシルは圧倒される。

本人が泣き叫んだ通り、イきっぱなしの膣穴の痙攣に晒されて、睾丸から噴き上がる勢いを止めることができない。

「叔母上、ぽく、そろそろイきそうです」

「ああ、いいわ、一緒にイきましょう。ああ、もうわたし何回もイっちゃっているけど、ああ一緒にイきたい。ああ、もう、もう、イク、イク、イク、イクウウウウウウ!!!」

左右の乳首を同性の年下巨乳娘たちに吸われ、甥っこの上で蟹股開きになった王妃は盛大にのけぞった。

「ぽくもっ!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム等此書は、完全の著作権に入てきません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



Valkyrie
http://www.comic- Valkyrie.com/

cranberry
http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
http://www.mille-feuille.jp/

モバイル二次元ドリーム
http://www.2d-dream.jp/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!